

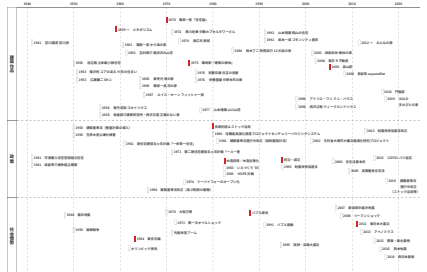
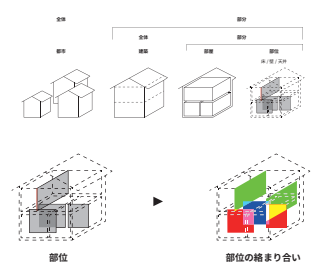
# 多義的部位の構築方法

- 部位の多義性に着目した複雑な全体をもつ住宅の研究及び提案 -

**概要**

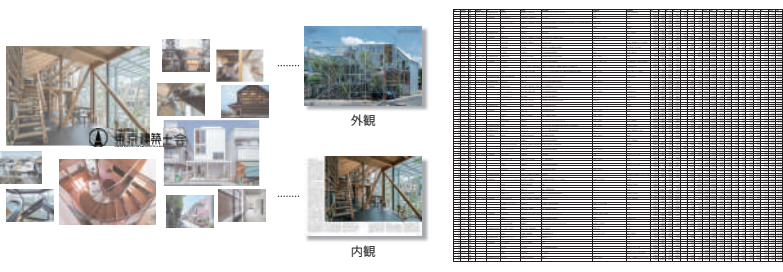
## 01 研究の背景と目的

これまで住宅は様々な意匠表現を成立させてきた。部位のもつ機能が転用され、別の機能として使われる今日ではどんな姿を都市や未来に残していくのか。そこで建築の部位がどう多様化しているのかを明らかにし、どういった機能で操作され、部位がどう構築されているのか把握する必要がある。本研究は、近年の住宅作品における《部位の機能（空間の仕切り / 架ける / 被覆）の関係性に着目した分析を行い、それらをもとに《部位の構築方法》を抽出し、部位の機能と構築方法の軸から関係性を把握する。さらに、近年の建築の傾向や部位の構築方法を明らかにする。これらを用いて設計を行い、多義的な建築への理解や、空間的な効用を生み出す方法論を検証する。



## 02 調査

《部位の機能》の関係性に着目した調査を行う。そこで、新人建築家の登竜門であり、近年多様化する「すまい」の新しい可能性を見出すことを目的とした「住宅建築賞」の過去11年分（2012-2022）の受賞作品計62事例のうち、「新建築」および「住宅特集」に掲載されている計51事例を調査対象とする。さらに、それら調査対象から主に外観写真と内観写真を選定し、計102枚の写真を分析する。  
※外観・内観写真の選定にあたっては、誌面の最初に見られる大きな写真とする。



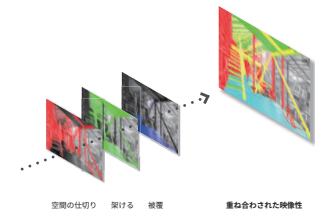


# 03 分析方法

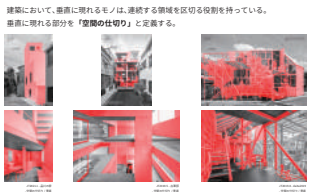
建築をつくることにおいて、垂直や水平といった基本的な建築の部位の扱い方や、再生建築によって注目されるようになった扱い方を考慮し、各部位を3つの機能に限定した。連続する領域を区切る「空間の仕切り」、連続する領域を繋ぐ「架ける」、仕上げ材を施し、下地が目視できない状態にすることで、環境的にも視覚的にも機能を持つ「被覆」。

選定された外観写真と内観写真を視覚的に確認できる情報のみで、即物的に解釈し、「空間の仕切り/架ける/被覆」の3つの機能を光の三原色を利用してそれぞれ【空間の仕切り（赤色）/架ける（緑色）/被覆（青色）】で色分けを行う。

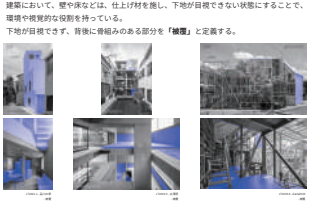
光の三原色の効果により、部位の機能が重複するモノには黄色や水色、桃色、白色が現れることで、建築写真を計7色（塗られていない部分を除く）によって塗り分けることができる。



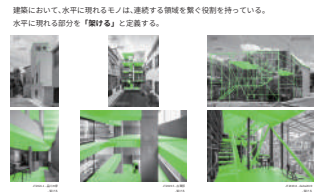
## 《空間の仕切り》



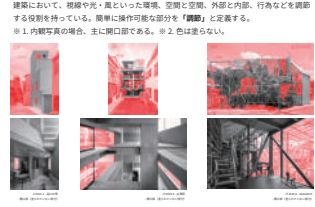
## 《被覆》



## 《架ける》



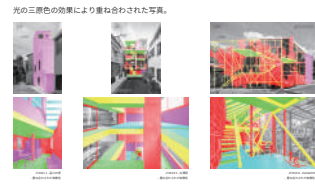
## 《調節》



## 《オリジナル》



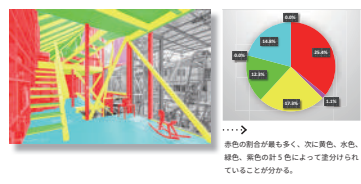
## 《重ね合わされた映像性》



# 04 分析

塗り分けられた写真のピクセル数を計測し、塗られた面積の全体に対する割合を円グラフによって示す。

102枚の写真から得られる102の円グラフを円グラフの色の割合が最も大きい面積を占める色、そこに大きい面積を占める色の割合から判断し、各円グラフを3種類に分類することが出来る。一つは、色の割合が平均的に現れる、同質タイプ。二つ目は、最も大きい面積を占める色の割合が円グラフの3/4程度を占める、異質タイプ。三つ目は二つのタイプが半分ずつ現れる混合タイプ。

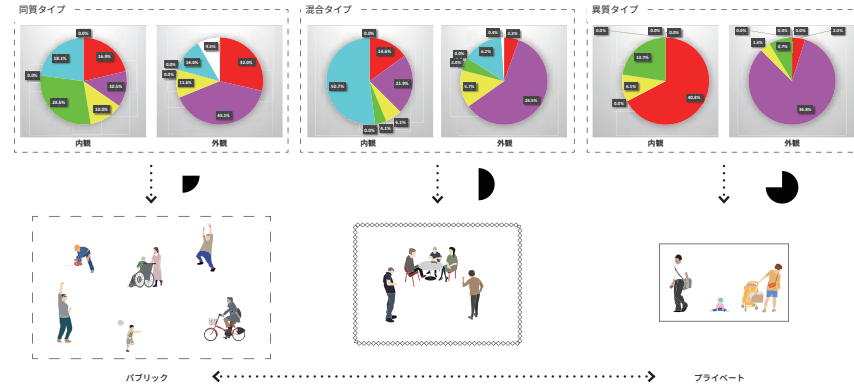


	内観	外観
同質	30	16
混合	17	13
異質	4	22



# 05 設計手法

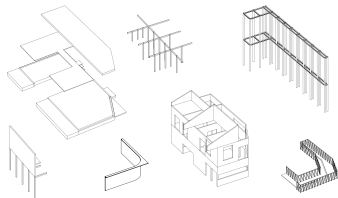
ある視点、ある部分における円グラフをタイプ別に設定していく手法が得られた。各室の要求に応じて円グラフを設定する。これ以降は仮説をもとに円グラフを用いる。まず、異質タイプは、同質タイプに比べ、一つの色が強く現れることから、全体性が強く、空間や人の関係性もより強固なものであるだろうと仮定し、私的な室において要求される。同質タイプは、各色が平均的に現れることから、それぞれが自律した関係であると仮定し、公的な室において要求される。これらを設計手法とする。



		年										
		2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
同質	内観	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]
	外観	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]
混合	内観	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]
	外観	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]
異質	内観	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]
	外観	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]	[Image]

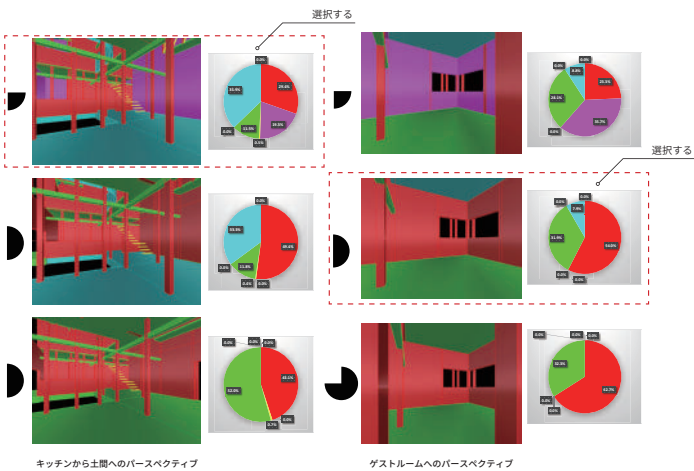
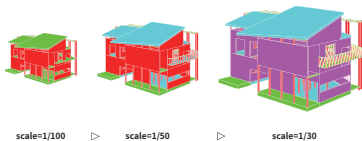
## 06 複数の機能をもつエリア

本計画地は、複数の機能の重ね合わせによって形成されている東京都荒川区東日暮里とした。計画地は私道と隣接しており、私道を車が通行するのは不可能だが、多くの地域の住人が生活道として利用している。敷地の条件をもとに、東京で働く私が住まう住宅を設計する。日中仕事で出かける私の代わりに地域の住人や、地域外から来る旅行者などが流動的に住宅を利用する。



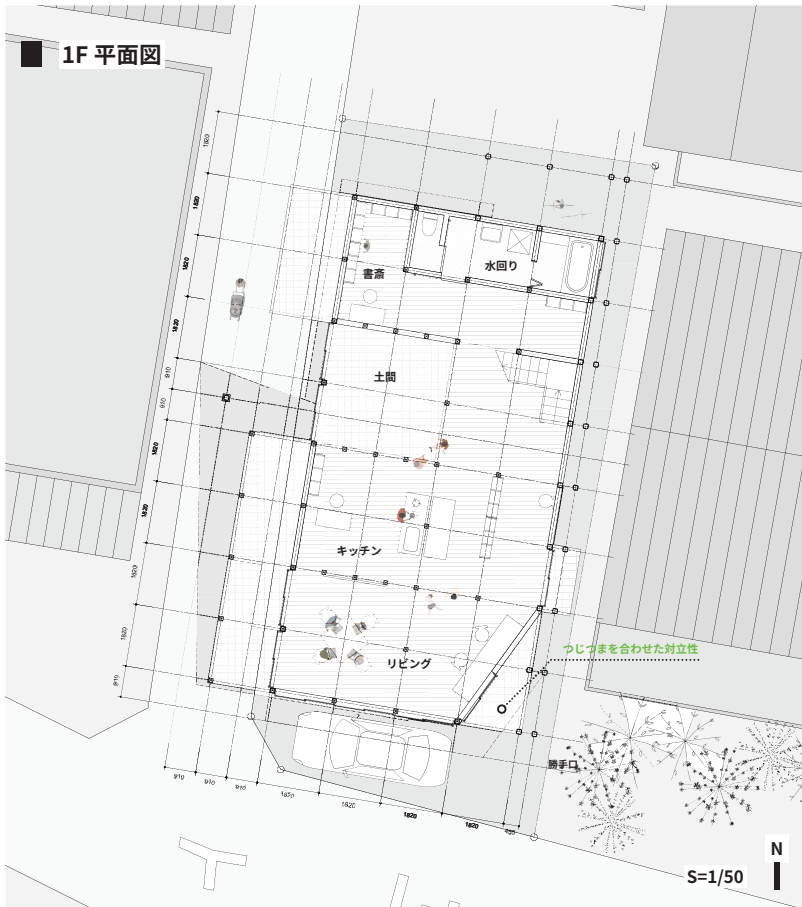
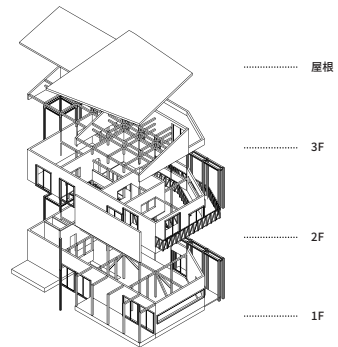
## 07 部分から検討

各室に求められる要求に応じて、部位を操作し、その都度、光の三原色による効果を利用して色分けを行い、円グラフ化し、タイプに分類する。  
例えば、キッチンから土間に向かう視点では、地域の住人たちが食材を持ち寄り一緒に料理をして振舞うような公民館のような室なので、現れる部位を調整しながら、同質タイプを目指して設計していく。

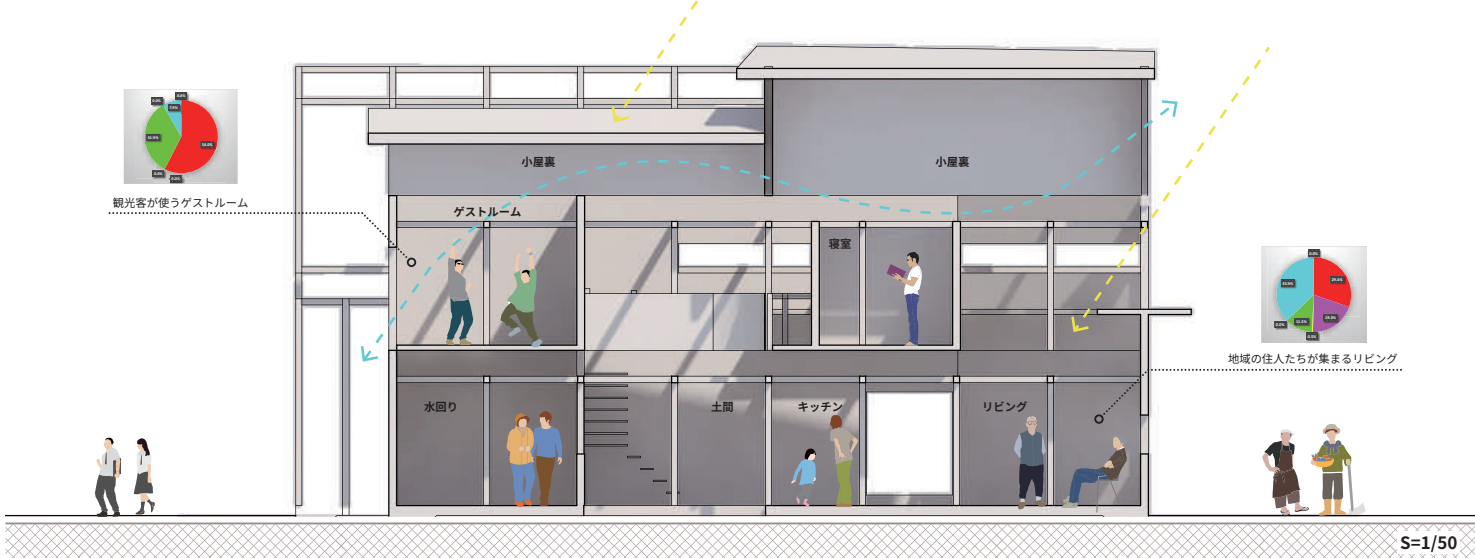


## 08 複雑な部分と全体

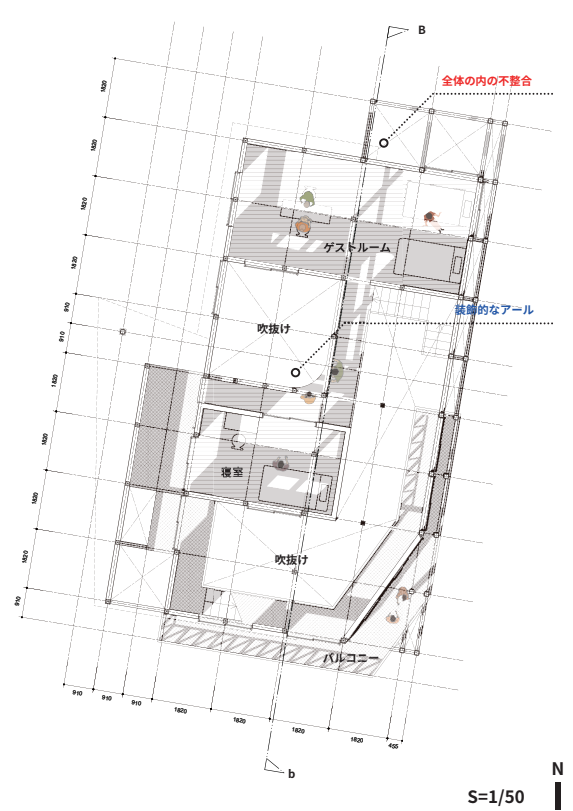
本研究は、部位に別の機能を与えることや部位の機能の視点から部位の構築方法を見つめるといった別の視点からの部位の読み解きを可能とすることで、複雑なものを複雑なまま捉える思考の一端を担うことを示した。  
設計案では、ある視点における部分の設計を主に行った。この手法を用いることはこれまでの全体から建築をつかっていくトップダウン的な手法ではなく、部分から組み立てるボトムアップ的な手法から建築全体をつくりあげることができる。  
ある部分のパースペクティブの集積は、複雑な全体を示すものとなるだろう。  
複雑な部分を複雑なままに全体を作り上げ、複雑なままあらゆるコトやモノを捉える思考となることを期待する。



## B-b 断面図



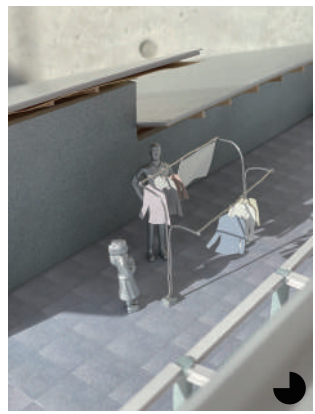
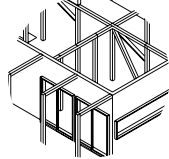
## 2F 平面図







見上げると被覆されている様子分かる。  
 装飾的なアールはコンクリートでできた厚みのあるものではなく、軽やかなものであり、被覆と架けると空間の仕切りの機能を持つ。



勝手口への通路に仕切りがずれた部分にスラブが突き出ている。領域をつなくもへと変化する。

